

数奇者伝

15

信頼得るよう
「続けることがまず第一だ」
というのが自分の中にあるんですよ。

てんご新聞発行人

市岡日出夫

さん(62)
三好市東祖谷



▲「てんごの会」結成を知らせる第一号。当時は写真もなく白黒だった。「気持ち充実しどるときはね一文章もい文章書けるんですよ(笑)」。レイアウトも毎回工夫を凝らす。

「振り返ってみることはないですね。こういう時ないかぎり。記事ですか。カメラ持ったって毎月いろいろなど撮るんですよ。その中から自分の気に入ったの入れとるだけです(笑)。作るのは一晩で書くんですよ。一気に。下書きは全然しません(笑)。点検なしにいくから、結構間違いが多いんです(笑)」。

待ち合わせ場所の東祖谷歴史民俗資料館。二階ホール前のロビーに今まで発行済みの全てを並べていただいた。B

4用紙一枚一枚に祖谷の山野草やイベント風景などの写真と共にびっしりと詰め込まれた手書き文字。祖谷の方言「てんご」(お節介なことをする)を冠した手作り新聞が発行されたのは97年5月。第一号からこれまで取材・撮影、編集、レイアウト、印刷(コピー)、発送準備まで全て1人で行っているのが市岡日出夫さんだ。

「いつの間にか帰って来て15年」。高校卒業後、大学進学のため上京。そのまま千葉県県の郵便局に勤めた。忘れも

日書つきよったんです。だから、書くことは全然苦にならないんです。自分、手紙書くのも好きだし、小学校五年か六年のころ先生に「書け!」と言われた日記はね、今も毎日書いてます。あの時こんなことがあったんじゃあちゅう

のピツと出てきますしね、忘れとつても。30部でスタートした「てんご新聞」は、現在発行部数300部超。地元の方はもちろん日本全国各地にいる「活彩祖谷村」(06年3月開村)村民の人達へ東祖谷ニュースを配送中だ。

しない91年8月。生まれ故郷今井地区であった同窓会に出席したことが転機となる。「郷土史家の方が30分ぐらい講演してくれたんですが、そのときにね「今井地区の人は先見の明があったのか薄情なのか、東祖谷の中で一番先に過疎になった」と云われたんですよ。

それ聞いたときに「エーッ!!それは意識せなただけどホンマすっこい」って自分の中にスツと入ってきて。そうなんかあー自分も(東祖谷を)捨てていつてる一人だったんじゃない、と自覚させられたんですよ、その一言で。ほんとにほんまな、それまで全然思ってたなか

ったですよ。(東祖谷へ)帰ってこようって。95年に帰郷。「自分らが出来ることせんか!」と地域おこしグループ「てんごの会」を97年5月に結成。その活動内容を伝えるべく新聞を発行し始めた。郵便局におったとき、ガリ切り。っていつて鉄筆で目録紙を毎



▲昨年、栗枝渡八幡神社秋祭りで御神輿を担いでいた市岡さん、祭り終了後に碓子達をパチリ!



▲市岡さんが生まれ育った今井地区へ懸いでいた今井橋。今はもうない。



▲「これホント見たとき、うわあ〜と思ったね!」。見事な銀杏絨毯の木村家住宅。

▶香川県の讃岐富士さんのサイト「讃岐富士の自然とのふれあい」(※「讃岐富士 てんご」で検索)内でPDF形式のてんご新聞(100号から最新号まで)が読むことが出来ます!